下町文化
NO. 226
2004.7.12

発行
江東区教育委員会
生涯学習部生涯学習課
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL(03)3647-9819
http://www.city.koto.tokyo.jp/~bunkazai

■ 松尾芭蕉生誕360年記念企画
☆ 芭蕉の風貌－画かれた俳聖－
○ あるく・きく・かく文化財レポート
☆運送屋さんの馬頭さん
○ 江東外見発見伝
☆成田山の江東区関係文化財
◎初級講習会20周年を迎えて
□ 江東歴史紀行
☆深川富士の山開き
△すだれ作って100年－すだれ職人3代－

松尾芭蕉生誕360年記念企画

芭蕉の風貌－画かれた俳聖－

平成16年12月19日(日)まで

江東区芭蕉記念館（常盤１－６－３）では、今年の芭蕉生誕３６０年を記念して、未公開の作品２点を加えた芭蕉の肖像画１９点を展示した「芭蕉の風貌」展と、江戸時代の和本に画かれた「和本にみる芭蕉・芭蕉庵」展を開催しています。

抱儀画・風外等賞「芭蕉坐像図」（江東区芭蕉記念館蔵）

＊芭蕉像の大衆化

芭蕉像には肖像画をはじめ、木像・塑像・陶像などの作品があります。今回の展示では、肖像画にスポットをあてることで、「芭蕉の風貌」を見ていこうとするものです。芭蕉の肖像は今日、有名無名を問わず、その数は相当量に上っているものと思われます。

芭蕉の生前、彼を画いた作品は限られています。しかし、芭蕉の没後、彼を画いた肖像画の製作は加速化され、俳諧が大衆化される過程で、次第に庶民に珍重されていったものと思われます。その背景には、宝暦～天明期（１７５１～８８）以降に本格化する「文化の大衆化」によって、一層芭蕉が偶像化・神格化される傾向が強かったことを示しているものと考えられます。

＊芭蕉像の見方と分類法

こうした多くの芭蕉の肖像画を見るためには、それらを（１）生前実像型（芭蕉の生前の姿を写実的に伝えている作品）、（２）生前イメージ崇高型（芭蕉の生前の姿に崇高的なイメージを加えた作品）、（３）崇高型（生前イメージ崇高型以降の時期で芭蕉像をより偶像化・一般化した作品）に大別することができます。

その３つの分類をもとに、さらにそ

の作品群は、①許六系芭蕉像群、②一蝶系芭蕉像群、③一蝶・許六系芭蕉像群、④杉風系芭蕉像群、⑤蚊足・百歳系芭蕉像群（便宜的類型）、⑥（許六）・破笠系芭蕉像群、⑦その他（芭蕉別人融合型）の7類型にまとめあげることができます。

この考え方をもとに芭蕉像を整理してみると、それぞれの作品が、どの作品をモチーフにして画き、どのような変遷を経てデフォルメされてきたのかを、確認することが可能になるものと思われます。

二・三の作品を見ていくと、例えば芭蕉の絵画の師であった森川許六が元緑6年（1693）に画いた「奥の細道行脚之図」（天理大学附属天理図書館蔵・複製）は、（1）生前実像型の①許六系芭蕉像群で、これをモチーフにした作品はなく、独自性の強い作品であることがわかります。

鳥山石燕筆「芭蕉坐像図」

鳥山石燕の画いた芭蕉像（左上写真）は、芭蕉の門人であった杉山杉風が画いた座布団に座した構図そのままであり、（2）生前イメージ崇高型をもとに、（3）崇高型とし、④の杉風系芭蕉像群とすることができます。

また破笠の作品（生前イメージ崇高型）を模写した抱儀の作品（左の写真）は、（3）崇高型・⑥（許六）・破笠系芭蕉像群になります。破笠の作品の特徴は、多くが頭巾や八徳の姿に画き、小物として芭蕉の旅をイメージした笠・杖が見られ、さらに数珠を持たせる傾向にありました。

このように芭蕉像は、それぞれ独自の構図にみられるものの、それはいくつかのモチーフとデフォルメによって、多くの作品が画かれています。今回の「芭蕉の風貌」「和本にみる芭蕉・芭蕉庵」の二つのテーマを通して、この機会にさまざまな芭蕉像に接して見てはいかがでしょう。

（横浜文孝）

抱儀画「芭蕉坐像図」

蠣崎波響画・岩間乙二賛「芭蕉と二哲図」

＊参考文献

横浜文孝「芭蕉の肖像―その類型とデフォルメの過程について―」（『江東区文化財研究紀要』7号）

『芭蕉記念館所蔵本**「俳諧画像集」Ⅳ―上巻2**』第24集（700円）発刊中。

【その他の主な展示作品】

・芋銭筆「卯月の芭蕉庵図」（昭和10年頃作）
・破笠筆「芭蕉坐像図」
・静山画「芭蕉坐像図」　※初公開
・作者不詳「芭蕉坐像図」　※初公開
・東洋画「芭蕉坐像図」
・日華画「芭蕉坐像図」
・桂斎画「芭蕉坐像図」
・蕪村筆「芭蕉坐像図」（安永8年作）
・海儈筆「芭蕉と雲雀図」
・呉春筆「芭蕉胸像図」（寛政5年作）
・一蝶筆「芭蕉と柳図」
・鄭培画「渡唐ノ芭蕉翁」
・資信画「芭蕉坐像図」
・梅室筆「芭蕉坐像図」
・石艸画「芭蕉涅槃図屏風」

芭蕉記念館

開館時間　午前9時30分～午後5時（4時30分までにご入場ください。）
展示室休室　月曜日（祝日を除く）
入館料　大人100円・小中学生50円
交　通　都営地下鉄新宿線・大江戸線　森下駅下車　徒歩7分
問合せ　芭蕉記念館
江東区常盤1―6―3
☎03（3631）1448

あるく・みる・きく・かく 文化財レポート

運送屋さんの馬頭さん

もう10年以上も前の話になりますが、私が米を配達している運送屋さんに、毎日きれいな花で飾られた石像がありました。「何のお仏様ですか。」と私。「あれは馬頭さんです。」「昔からあったんですか?」「いえ、先代が戦後拾ってきて、祀ったらしいです。」という会話があった。

先日、思い出して行ったところ、その日もきれいな花で飾られていました。そこで、この幸せな馬頭観音さんの話が聞きたくなり御邪魔してみました。

場所は、南砂1―9の運送屋さんです。奥様の話によりますと、お嫁に来た時にはあったそうで、義父様がお祀りし、御主人が現在地に引っ越した時、大分傷んでいたので修復し、お寺さん(平野1・本立院)に拝んでもらったとのことです。「今でも拝んでもらうんですか。」「そう、馬頭さんの日。」「馬頭さんの日というと?」「3月10日かな? もう魂が入ったんだって。」

帰りに、昔、引越しする前に馬頭観音があったかもと思われる(これまた)運送屋さん(南砂1―20)にあたってみた。「子どもの頃にあった馬頭さんみたいの、何個かあったような気がするけど。」「ああ、あれ馬頭さん、あったかもしれないね。」答えている当人より、私の方が年上かもしれない。「今度、馬頭観音(南砂1―3―20)のお祭りの日(3月10日)、大勢来るから、その時聞いてみたら。」「ええ、行ってみます。」

運送屋さんに大事にされている馬頭さんがいつまでも続いていくようにと思いながら家に帰った。

(文化財保護推進協力員　村島晟介)

【編集人付記】

村島さんからは、南砂5―7―12にある石造如意輪観音像も、地元では「馬頭観音」と呼ばれてきたこと等も報告していただいています。現在、区内には今回の石造馬頭観音像も含め、8基の馬頭観音(うち4基が登録文化財)が確認されています。

江東外見発見伝

成田山の江東区関係文化財

今回は、文化財系自主グループ「江東区の歴史と文化を継承する会」(会長・上野仁義)が発行した『水彩抄』第2号(2004年)に掲載された「六月見学会　成田山新勝寺」のレポート(斎藤公子氏執筆)から抄出させていただきました。たいへん興味深い報告が寄せられています。

【石造狛犬】 釈迦堂前にある。釈迦堂は、安政5年(1858)に建立された本堂を、昭和35年移築した風格ある建物である。狛犬に「深川中島町(永代2)」の刻銘が見つかる。

【奉納額】 額堂にある。正面に7代目市川団十郎の像が配され、おびただしい数の額が掲げられていた。特に深川周辺地区の額が際立っていたと思うのは気のせいだったのか。屋根付きとは言え、周囲からの風雨は避けようもないが、これだけの額が奉納されているのを目の当たりにして、庶民の信仰の拠り所としての成田山の大きさを痛感した。

【天水桶　釜屋七右衛門作　文化11年在銘】 光明堂前にある。光明堂は元禄14年(1701)中興1世となった照範が建てた本堂を移築したもの。天水桶に釜屋七右衛門の銘を見つけ一同大感激した。額にも深川の講名など多数見ることができた。

【玉垣】 奥の院。やはり深川の講名が軒並みあり、いかに成田山と深川が強い結びつきを持っていたかを改めて認識した。出開帳(でかいちょう)が江戸では深川不動だけだったことを考えると納得できる。

【力石(ちからいし)】 霊光館の裏庭にある。「永代町(佐賀2・福住2)」の刻銘と、三井親和(しんな)の子の親孝の名前があった。

＊　＊　＊

さあ、夏休みです。ご旅行の計画はありますでしょうか。もし旅先で江東区関係の文化財を見つけましたら是非ご一報ください。地域の歴史を探しに出かけます。

石造灯明台も深川不動堂と同じ様式です。

文化財保護推進員講習会20周年を迎えて

江東区文化財保護推進員講習会（以下「初級講習会」）が、今年度で20周年を迎えることになりました。したがって、現在は第20期の受講生が講習会に参加しています。20周年という節目の年を迎え、初級講習会のあゆみを振り返るとともに、これからの初級講習会と文化財保護・生涯学習のあり方について考えたいと思います。

■初級講習会の目的■

文化財行政の発展のためには、行政だけではおのずと限界があり、文化財保護活動をより有意義に展開するためには、行政と地域住民が一体となってその活動に取り組んでいく必要があります。

そこで、区内各地域における郷土学習や地域史研究、伝統的文化活動、そして文化財の保護活動を推進する地域リーダーを養成する目的で開催してきたのが、初級講習会です。

初級講習会の期間は約7か月で、定員は30人（区内在住者）。現在の講習会プログラムはのちほど紹介しますが、修了式を含め23回に及ぶ講習会を通じて、地域の歴史や文化財を学習するとともに、文化財調査の方法や技術なども習得します。

■初級講習会20年のあゆみ■

初級講習会の開催は、昭和60・61年の両年度、文化庁が東京都教育委員会に委嘱し、江東区教育委員会が実践研究団体となって実施した「地域における文化財保護推進活動リーダーの養成」が出発点でした。

この文化庁の「文化財愛護のための地域活動の推進方策に関する研究」事業は、昭和55年度から都道府県教育委員会に委嘱し、「地域の文化財を愛護し伝承しようとする地域住民の活動を助長する目的」で進めてきたものであり、そのねらいは、「地域の文化財愛護の活動についての新しい方策を実践的に開発しようとする」ことでした。

昭和60年度に開催した第1回の初級講習会には、定員の2倍を超える62人の応募があり、33人が受講しました。この受講生の中には、現在、江東区伝統工芸保存会の会長を務める岸本忠雄氏の顔もありました。

『文化財愛護活動推進方策研究委嘱報告書』（文化庁）には、第1回初級講習会について、「この講習会が単に受講生の趣味的なものを満足させるものだけで終わってしまってはならないだろう。地域の伝統文化・文化財というものが、地域の歴史を考え、また将来の発展にとっていかに重要であるかということを認識させるとともに、地域の人の手によって、地域の文化財を残し、護って行かなければならないという意識を喚起しなければならない」とあり、講習会の開催当初から、将来を見すえた明確な問題意識があったことがわかります。

最初のころの講習会は、全25回のうち、文化財の調査方法・実習に9回（現在は3回）もあてていることが、最近の講習内容と大きく異なる点です。

第1回初級講習会は23人が修了し、修了率は約70パーセント、平均年齢は61歳、男女の内訳は、男性17人・女性6人でした。

講習内容に変化がありますので、まったく同じにみることはできませんが、第1回の数字を近年のものと比べてみると、修了率は約80パーセントに上昇し、男女の比率はほぼ半々となっています。年齢層は年度によって異なるので一概には言えませんが、定年を迎えたと思われる60歳代が最も多く、最初からの傾向だということがわかります。ただし、少数ながらも20代以降各世代に分散しており、受講生の間では、それがよい意味での刺激にもなっています。

第19期までの修了生は約340人。修了生のアンケート調査によると、地域の歴史や文化に対する見方が変わった、愛着を持つようになった、という意見が最も多くみられます。受講の理由は、江東区に生まれ育ったが地元の歴史を知らないから、あるいは、転居して来て地域の歴史や文化を知りたいから、この二つに集約されるようです。最近では、転入2～3年目という人の受講が多くなりましたが、初級講習会が、区内で生活してきた人と転入してきた人との「交流の場」になっていることが注目されます。

受講風景（於、教育センター）

■初級講習会のプログラム■

それでは、図をもとに初級講習会のプログラムを紹介しましょう。

5月初旬のオリエンテーションでは、講習会の概要を説明し、記録映画を上

映します。2―①は、江東区の歴史を説明する際に文化財に触れるのではなく、タイトルにあるように、文化財という遺産（情報）を通じて地域の歴史を明らかにします。同②はちょっと昔の暮らしを学びますが、そこでは民俗調査団の成果と蓄積が生かされています。3で文化財保護の制度的内容と愛護活動のあり方について理解を深め、4―①～④は地区別講習会（今年度は「亀戸の歴史」）の参加になります。

5―①～③では、博物館等の役割や利用方法について講義を受けたあと、実際に博物館を見学します。博物館見学研修は中級研修会受講者と一緒に行うため、毎年見学施設を変えており、学芸員による博物館運営の説明や展示解説を受けて学習し、個人の入館では見ることのできない収蔵庫などの裏方も見学します。博物館見学後、受講生は約2か月間の夏休みとなりますが、この間、各自で区外の博物館・資料館を少なくとも一館見学し、9月初旬にその感想を報告します。地域の歴史を学ぶには、広い視野に立った柔軟な姿勢が大切であり、なるべく多くの博物館を見学することによって、自分たちが住む地域ではどのような博物館・資料館のあり方が望ましいかを考えます。

博物館見学の様子（横浜市・神奈川県立歴史博物館）

文化財としての価値を見いだすためには、調査が不可欠であり、それを単元としているのが、6―①～③です。調査実習の講義を受けたあと、3～4人のグループを決めて現地調査を実施します。現地調査は、神社にある燈籠や石碑などの石造物を対象として、計測の仕方、調査台帳の記入、写真撮影、拓本の採り方などを学び、そしてその調査をもとに各人が報告を行います。

7―①では民俗芸能を、同③では工芸技術に関する理解を深めるとともに、それらが育まれてきた歴史的背景を学習します。また同②では、文化財を直接目にすることによって、地域の歴史と文化財保護の重要性を認識します。

8は、外部講師を招いて文化財保存の方法など、企画テーマにあわせた講演をおこなうもので、文化財保護強調月間の関連事業に組み込まれているため、一般の方でも受講できます。9では、ボランティア活動の具体的な取り組みを紹介しています。

最後の10―①～③は、地域の歴史を学習していくための基礎的方法を学ぶもので、図書館利用や文献資料の活用の方法をおぼえ、さまざまな資料の読み込み方や、そこから何がわかるかなどを、具体例を通じて学習します。

第20回文化財保護推進員講習会プログラム

単　元	学　習　内　容
1	オリエンテーション・記録映画上映
2－①	江東区の歴史（Ⅰ）―文化財にみる歴史
－②	江東区の歴史（Ⅱ）―暮らしと民俗
3	文化財保護の仕組みと愛護活動
4－①	亀戸の歴史
－②	亀戸のむかしさがし―史跡めぐり
－③	亀戸の民俗
－④	亀戸の文化財
5－①	博物館・資料館の利用―講義
－②	博物館・資料館の利用―見学
－③	博物館・資料館の利用―報告
6－①	調査の実際（Ⅰ）―講義
－②	調査の実際（Ⅱ）―実習
－③	調査の実際（Ⅲ）―報告
7－①	江東区の文化財（Ⅰ）―民俗芸能
－②	江東区の文化財（Ⅱ）―史跡めぐり
－③	江東区の文化財（Ⅲ）―伝統工芸
8	公開講演会
9	文化財愛護活動の報告
10－①	文献資料の活用
	文献資料の読み方（Ⅰ）―絵画資料
－②	文献資料の読み方（Ⅱ）―地誌資料
－③	文献資料の読み方（Ⅲ）―活字資料
11	修了式／1年を振り返って

■修了生の活躍■

初級講習会修了生の次のステップとして、中級研修会と文化財保護推進協力員制度がありますが、基礎的な知識や技術を身につけなければ、そこから前に進むことはできません。その意味で、初級講習会は最も基礎的な講習会となっています。

本誌222号でも紹介したとおり、近年は文化財系の自主グループが続々と誕生しており、独自の活動をおこなっています。しかし、修了生の活躍の場は、グループ活動だけではありません。小学校に招かれて、児童に昔の暮らしや祭の話などをしている修了生がいます。マンションの自治会では、江東区の歴史を講演する修了生がいます。修了生たちは着実に、しかも自分が暮らすそれぞれの街で、初級講習会で学んだ知識を地域社会のために役立てています。

現在、地域住民参加型の博物館運営が全国的に注目され、自治体によっては確実に成果をあげてきています。文化財行政も、住民参加による文化財の保護と活用、そして生涯学習の推進が大切だといえるでしょう。初級講習会は、そうした住民参加による文化財保護とともに、地域における人材の育成という役割を果たしてきたのです。

江東歴史紀行
深川富士の山開き

江戸夏の年中行事

天保9年（1838）に出版された『東都歳事記』には、6月1日に行われる江戸の行事として、富士塚の山開きが紹介されています。

「富士参。前日（5月晦日）より群集す。是富士禅定（修行）の心とぞ。駿河国（静岡県）富士山は、常に雪ありて登ることを得ず。故に炎暑の時を待て登山す。是にならひて今日参詣するなり。」

現在、東京23区内には68基の富士塚が残っていますが、今でも山開き行事を行っているのはその約3分の1といわれています。江戸時代にはこれを相当数上回る場所で山開きが行われていたはずです。『東都歳事記』は、駒込の富士神社（文京区）の山開きについて「境内、見せ物諸商人出、道すがら幟、提灯等多く出す。」とその賑わい振りを活写し、続けて富岡八幡宮境内の富士塚と亀戸の浅間神社も紹介しています。

深川富士へ登る人々（『東都歳事記』巻2）

文化・文政期（1804～30）を中心に、「江戸八百八講」と俗に言われたように、江戸の庶民を中心に富士山を信仰の対象とする富士講が爆発的な拡まりを見せました。富士講の人たちは住居の近くに富士山を模した「富士塚」を築きました。富士塚の最も古い例は、安永8年（1779）に造られた高田水稲荷（新宿区）の富士塚（廃絶）とされます。これを造った丸藤講の開祖・藤井藤四郎（日行青山）は「富士講元祖」食行身禄（1671～1733）の直弟子で、植木職人の技術を活かして造ったものとされています。江戸時代、女性は富士山の2合目以上に登ることを禁止されました。また、実際の富士登拝には多くの困難がありますが、富士塚に登ることによって本来の富士詣と同じ功徳が得られると考えられていました。そのため、人々は富士塚のことを「お富士さん」と呼び、6月1日の山開きの日には、富士講の講員に限らず老若男女が集い賑わったのです。

現在、江東区においては、3つの富士塚が現存しています。南砂の富賀岡八幡宮の富士塚（砂村富士）（区登録有形民俗文化財）では、現在でも旧暦の6月1日にあたる7月1日に、身禄直弟子の吉田平左衛門（三行貞山）の流れを汲む山吉丸す御水講が中心となって山開き行事を行っています。「本所富士」（区指定有形民俗文化財「亀戸の富士塚」）は東京都の再開発事業により塚上にあった浅間神社社殿が隣地に移り、現在は公園として整備中ですので、平成8年が最後の山開きとなりました。そして富岡八幡宮の富士塚は、昭和40年頃に破壊されてしまいましたが、平成14年に小規模ながらも再建され、山開き行事の一端が復元されたのです。

深川富士復活！

富岡八幡宮の富士塚（深川富士）ですが、現在は境内北西の末社、富士浅間神社・金刀比羅神社の後ろにあります。以前は更に北に位置し、数矢小学校の横にありました。この富士塚は、文政3年（1820）に江戸富士講のひとつ山玉講が造立したものとされます。山玉講は本所猿江元町・深川今川町（佐賀2）の清山正行こと清六という町人が創始した富士講です。清山正行は天保7年（1836）に富士登山六十六度を果たすなど熱心な信仰を持っており（静岡県富士宮市・人穴浅間神社所蔵墓碑）、向島（墨田区）や葛西長島・同桑川・同雷（江戸川区）、浦安町・猫実・同堀江（浦安市）などの東京湾北部域に発展を遂げました。天保13年（1842）に北区田端の丸長講が作成した「百八講紋曼荼羅」にも載る伝統ある江戸富士講のひとつです。

実は深川富士は、これを遡る享保7・8年（1722・23）頃、当時流行していた相模国大山（神奈川県伊勢原市・大山阿夫利神社）の石尊権現

壊される前の深川富士（昭和36年10月）
（太田畯三氏所蔵）

を勧請し、もともとは石尊山（別名・宮口山）として築造されたもののようです（『御府内備考続編』）。大きさは高さ６ｍ、周囲は90ｍもあったといいます。その後、衰退ししばらくして、富士塚として再生されたわけです。このとき富士浅間神社も勧請され、高さ10ｍ、直径18ｍの規模を誇ったと言われています（『富岡八幡宮御由緒』）。

『新撰東京名所図会』によれば、頂上の平地に立つと、品川の砲台（お台場）が間近に見えるなど、かなりの眺望だったといい、人々は思わず「快」と声を上げてしまうほどだったといいます。明治13年（１８８０）品川の丸嘉講が出版した、東京府内の13箇所の富士塚を廻る『富士山遥拝所道之記』によれば、浅草（台東区・小野照崎神社）から鉄砲洲（中央区・鉄砲洲稲荷神社）に行く間に深川富士に寄ることになっています。

小さくてかわいい富士塚が復活しました。

しかし、富士講の信者のみならず、近隣の住人からも大変に愛された深川富士でしたが、残念ながら昭和40年頃に壊されてしまいました。ところで富士講研究家として知られた岩科小一郎が、この富士塚に登ったことをきっかけに富士講研究の道に入ったとのことですが（『富士講の歴史』）、ブルドーザーで崩されている最中深川富士を訪れ、石碑の断片を拾ったという回想録を残しています（『あしなか』148輯）。

夏の風物詩

深川富士の山開きは、江戸時代の錦絵に描かれるなど江戸名所のひとつとして著名でした。『東都歳事記』だけでなく、『守貞漫稿』（嘉永６年）でも、深川を含んだ８個所の富士塚を列挙し、「平日は此模山に登ることを許さず、此両日（５月晦日・６月１日）のみ詣人を登す。（中略）富士詣でと号して群集す。」と記しています。

明治に入っても『新撰東京名所図会』（明治30年）にその様子が描かれるなど季節を感じさせてくれる格好の場所でした。『東京年中行事』（明治44年）では次のように述べています。「東京の市内における富士神社や浅間神社の数も大分あれど、最も賑わうのは深川八幡内、浅草象潟町（台東区・富士神社）、鉄砲洲稲荷内、茅場町薬師内（中央区・茅場町薬師末社天満宮）、神田明神内（千代田区・神田明神末社富士神社）、南千住天王社内（荒川区・素盞雄神社）、高田町（水稲荷）、駒込のそれであり、深川八幡及び茅場町薬師境内のは六月一日に（中略）行われるのである」。深川富士が筆頭に掲げられています。

なお、富士講の人々はこの日、「七富士参り」と称して、近隣の富士塚７箇所を廻りました。大正末年から昭和初期にかけて富士山北口教会が作成した「七富士廻りの栞」によると、深川富士は神田廻り（中央）コースの６番に設定されています。

さて、『東京年中行事』には更に次のようにあります。「各所必ず麦藁製の蛇形を生杉枝に纏いたるを売るに、大小あれど皆同製なり、富士詣人の方物なり」。山開きの日、各地の浅間神社や富士塚では「厄除け神龍」とか「蛇」と呼ばれる麦藁細工の蛇のお守りが配られました。その由来を尋ねると、宝永年中（１７０４～１１）、疫病が流行したとき、駒込の喜八という農夫が麦藁製の蛇を富士神社の周辺で売り、これを求めた者は疫病を防ぐことができたためだといいます。また、村人の雨乞いの祈りに応じて、天から神木に降り立った龍の姿をかたどったものだともされます。季節柄、水が不足したり、飲み水を媒介とした病気が流行したりするので、それを防ぎたいとする素朴な祈りが山開き行事とからみあったものかと思われますが、いずれにしても麦藁製の蛇守りは、真夏の富士参詣に欠かせないお土産だったのです。

深川の麦藁大蛇は、関東大震災の頃には廃れていたようですが、今回富士塚の復元と共に復活しました。

麦わらが化けて蛇となる暑い夏
蛇が出れば矢張り蚊のでる　　**江戸の富士**

富士山山開きは江戸の夏到来を告げる行事でした。富士山を守っていた山玉講はもうありませんが、季節の行事の復活は喜ばしいことです。

（文化財専門員　今野慶信）

御開扉された富士浅間神社（上）と麦藁製蛇守り（右）

―夏を涼しく―

すだれ作って100年

～すだれ職人三代～

■新大橋にほど近い場所で、すだれを作っている豊田すだれ店が、今年で100年目を迎えます。

3代目になる豊田勇さん（昭和13年生まれ）は、区無形文化財（工芸技術）の登録を受けたすだれ製作技術の保持者として認定されています。その技術は、初代の祖父丑次郎さん以来受け継がれてきたものです。

丑次郎さんは、神田岩本町のすだれ職人のもとで修業を積み、明治37年（1904）に旧新大橋のたもとで開業しました。豊田すだれ店のはじまりです。橋の移転とともに現在地に移り、父盛雄さん、勇さんと続いて、今年で開業100年を迎えました。

歌川国安「東都深川沖釣之図」（部分）（文化財係所蔵）

■すだれの歴史は古く、日本が始まって以来と言われるくらいですが、もとは魚を捕るのに用いた簀を窓に垂らしたことからはじまったといわれます。すだれには「簀垂」の意味があります。

細く割った竹、ヨシ（アシ）、カヤなどを間隔を開けて、木綿系・細縄などで編み連ねていきます。夏には窓や戸口に掛け垂らして、日除けや通風、室内外の仕切りに用いられています。江戸時代には、屋形舟の日除けにも用いられました。

竹製では、一般的にはマダケを細く割ったヒゴで編まれます。御簾と呼ばれる平安時代ころから宮中や寺社などで使われてきたすだれは、ヒゴがきわめて細い丁寧な細工のものです。

竹磨き

竹割り

ヨシで編んだ大きなものは葦簀といい、商家や夏の海の家の日除けに多く使われています。

■豊田さんは、御簾や一般的なすだれのほか、衝立、海苔巻きをまく寿司すだれなども作っています。また、芝居用のすだれを作っているのは、豊田さんだけとのことです。

芝居に使うものは、竹ヒゴで作ったものを用いるため、竹磨きや竹割りに高い技術が求められます。（写真参照）また、出しものや役者に合わせて、粗さや大きさなどを作り変える必要があることから、芝居の知識も必要になります。しかし、昔ながらの竹を割っての手作業でのすだれ作りは、今では習おうとする人は少なく、その技は貴重なものとなっています。

■さりげなく生活のなかにとけこみ、和を演出してくれるすだれ。今年の夏も涼しげにしてくれることでしょう。

すだれ作りを体験してみませんか。

7月18日（日）に「職人の技体験」をおこないます。他に、更紗染め、彫刻、漆ぬり、べっ甲細工などの体験もあります。詳細は、左記へお問い合わせください。なお、教材費がかかります。

【申込】森下文化センター
江東区森下3―12―17
☎03（5600）8666

訃報

江東区登録無形文化財（工芸技術・足袋製作）保持者・箕輪庄太郎氏（新大橋1）は、去る5月21日に逝去されました（82歳）。

工匠館壱番館の「はくもの」コーナーに箕輪さんの作品が展示されています。

謹んで追悼の意を表します。